

楊公椒山遺属

明代嘉靖年間の進士、直隸容城の人（1522-1566）

人たる者、君子になろうとする志を立てよ。心は一身の主なり、樹木の根のごとし。心に天理が存し、公道が存すれば、その行ないは好いことであり、これが即ち、君子である。心中に欲や私意があれば、好いことを行なっても、最後まで続かない、外では好い人を装うが、看破されてしまう。およそ天理に合うことは行ない、天理に合わなければ止める。人と相處するとき、謙虚で誠実であれ。労苦を避けることなかれ、甘美をむさぼることなかれ。人に譲り、人を受け入れる。自分が損をするほうがよく、自分がいじめられるほうがいい。恩は忘れず、恨みは捨て去る。人の善を見てほめたたえ、人の過ちを聞いても何も言わない。人はあなたに、ある人があなたの恩に感謝していると言う、そこで、私のほうこそあの人に恩を感じており、その人は私に恩はないと言う。ある人が私に悩 [いか] り、私を謗 [そし] っていると伝える人がいる、そこで、二人は平素、仲がよく、悩み謗る道理などないと答える。人が自分より勝れていれば、その人を敬い、重んじる。傲 [おご] り忌 [うら] みの心をもってはならない。人が我に及ばなくとも、謙虚にし、軽んじたり、卑しむ心があってはならない。人との交わりが久しく、ますます密となれば、その行ないは家や国へ広がり、恨みはなくなる。老成忠厚で、書を読もうとする、学ぼうとする人に出会ったら、肝胆相照らす友とせよ。言葉は信が必要であり、日々相處し、その薫習を受ければ、自然に好い人になる。我、同学とともにこれに勉むことを願う。

この一段の文章は楊公の遺言から取り出したもので、大体全文の十分の一にあたる。この段落は私たち修行者にとって、非常に重要である。特に私たちに、いかに事に処すべきか、いかに人に対すべきか、いかに物に接すべきかを教導している。よって、真剣に努力し学ばなければならない。

楊公椒山は明代の人で、嘉靖年間に進士に合格した。直隸容城の人、すなわち現在の河北省である。人となりは公平で率直であり、清官であった。清官はとかく、嫉妬や策略からまぬがれることができないが、楊公もそれを回避することができなかった。

楊公の遺属は長く、その後人に対して、いかに勉学すべきか、人としていかに身を処すべきかと周到に配慮している。非常に得がたい好き文章である。楊公は自分の子孫に教訓として書き残したのだが、了凡先生の家訓四カ条と同じく、私たちが常々読誦すれば得るところが大きいことは確かである。

「人たる者、君子になろうとする志を立てよ」

人たる者、志がなくてはならない。これは、学問に励むため、人となるために第一に重要なことである。私たちはこの世で生活する際、一定の方向、目標があれば、努力、精進し、自然と成就する。もし、人がこの世で、方向もなく、目標もなければ、憐れむべきである。年老いるまで、一つの事すら成しとげられない。仏法を学ぶことも例外ではない。数十年、学んでも成就しない。原因は方向がないからであり、目標がないからである。ここからも分かるとおりに、志を立てなければどうしようもないのである。

では、志を立てて何をしようとするのか。楊公は好いことをおっしゃった。君子になる志を立てよと。君子とは立派な人のことである。人はこの世で道を知り、立派な人にならなければならない。そうすれば、その一生はむだに過ごしたのではない。君子はさらに上って、賢人になり、賢人はさらに上って聖人になる。ところで、楊公の定めた基準は高くはない。これによって、当時、楊公の子孫が中下根（宗教的素質が中下程度）の者であることが分かる。これはちょうど私たちに符合する。私たちも中下根に属するので、楊公はまさに私たちに対して説いてくれたのである。

昔、学問の志は聖人や賢人になることであった。「聖人」は宇宙や人生の真相に通暁している。だから、聖人と「仏」の意味は全く同じである。目覚めた者を中国では聖人と称し、インドでは仏と称した。ここからも分かるとおりに、儒家と仏家の目標は同じである。ともに目覚めた人になる、明白 [めいばく]（凡聖迷悟を超越した境地）の人になることを願う。明白人はその一生で、生活にしろ、仕事にしろ、事に処するとき、人に対するとき、物に接するとき、決して過ちを犯さない。その人のあらゆる行為は必ず、情理に合い、法に合致する。必ず社会に益し、衆生に益する。必ず世の人のよき模範となる。このような人が賢人であり、君子である。だから、この志は立てなければならない。

仏教は、私たちもこのようにするようにと教える。四弘誓願 [しぐせいがん]（菩薩が起こす四つの広大な誓い）は仏の根本の教えである。第一は「衆生無辺誓願度」 [しゅじょうむへんせいがんど] である。この句は志を立てよという意味で、現在の言葉で言えば、一切の衆生が迷いを破り悟りを開き、苦を離れて楽を得るよう奉仕し、助けることである。

ところで、あなたが他の人を助けたいと思ったら、まず、自分を成就させなければならない。もし、あなたに徳の力、学問がなければ、何をもって助ける

のか。四弘誓願の第二条は「煩惱無尽誓願断」[ぼんのうむじんせいがんだん]である。煩惱を断つとはすなわち、自己の徳行を修め養うことである。真に道徳があって始めて、真に衆生の益となり、社会に益する仕事をなすことができる。

道徳があって、しかる後に能力を学ぶ。「法門無量誓願学」[ほうもんむりょうせいがんがく]、この一条は自己の能力、技能を充実させ、自己の智慧を培い養わなければならないという意味である。智慧があり、技術があり、能力がある、そして徳行があって、衆生のために奉仕すれば、仕事を見事にまっとうし、真に他の人を助けることができる。究極の目標は「仏道無上誓願成」[ぶつどうむじょうせいがんじょう]である。私自身が仏となることを誓い、一切衆生が仏となるのを助けることを誓うのである。仏の教えに従い、私たちはこの誓いを立て、この志を立てる。

「心は一身の主なり、樹木の根のごとし」

「心」は根本である。仏法は「心が生ずれば一切の法が生ず」と説く。また、「一切の法は、心の想いより生ず」とも説く。一切法（あらゆるもの。すべての現象）、十法界（十の世界。地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏の十界）にあって、あなたの心が善を想い、正を想えば、四聖法界、人天法界が現われる。心が邪[よこしま]で、悪ならば、餓鬼法界、畜生、地獄法界が現われる。まさに「一切は唯だ心が造る」である。『華嚴経』で説く「まさに法界の性を観るに、一切は唯だ心が造る」の道理に必ず精通しなければならない。

「心に天理が存し、公道が存すれば、その行ないは好いことであり、これが即ち、君子である」

何を天理というのか。天理とは人倫の道である——父子に親あり、君臣に義あり、夫婦に別あり、長幼に序あり、朋友に信あり。人倫の道は延伸し、社会全体へ、国家全体へ、この世全体へと到る。自分の家庭から全世界へ到ると、人々は平等に相対し、仲睦まじく一緒に生活する。これが「天理が存する」ということである。

「公道が存す」。公とは私心がないことである。人に対しても物に接するときも天理と相応じることが公道である。中国人はいつも天理、国法、人情を口にすが、天理と相応じる、国法、人情と相応じる、これが公道である。

心中に公道があり、どんなことをしてもすべて好いことであれば、この人を君子という。君子は好いことを行ない、悪いことは行なわない。君子が心の内に考えることは、決して天理に背くことはない。君子が毎日接するのは必ず聖人賢人であり、聖人賢人の書を読み、聖人賢人の道を行なう。これが君子である。

「心中に欲や私意があれば、好いことを行なっても、最後まで続かない。外では好い人を装うが、看破されてしまう」

「人の欲」とは財・色・名・食・睡である。「私意」とは私利私欲である。心の中で五欲を享受したいと思うだけで、私利私欲があるだけで、「好いことを行なっても、最後まで続かない。外では好い人を装うが、看破されてしまう」。なぜなのか。長続きしないのは、好いことがあなたの心と相応しないからである。なぜ好いことをするのか。人に見せるためである。長続きしないから、結局は見破られてしまう。一度見破られたら、一文の値打ちもなくなる。あなたは見せかけであり、本物ではない。ちょっと好いことをするにも目論みがある。この目論みは必ずや、あなたの私欲を満足させるものである。このような人は中国社会では小人という。悪業を造り、心と行ないが不善ならば、報いが好いはずがあろうか。

「およそ天理に合うことは行ない、天理に合わなければ止める」

「天理」は道理である。道理とは何か。社会に利益 [りやく] があり、人に利益があり、環境に利益がある。これは好いことであり、あなたもなすべきである。

「天理に合わなければ止める」。人に好いところがない、環境に好いところがないなら、やっちはいけない。自分に好いところがあるが、他の人にとって好いところがない。このようなことは行なっちはいけない。人に好いところがあり、自分にも好いところがある、それはやるべきである。人に好いところがあるが、自分にとって好いところがない。それは、やるべきである。すべては社会のため、人々のため、衆生のため、これが君子である。君子は人のために己を捨てることができる。小人はこれに反し、人に損を与え、己を利する。君子は己が損をして、人を利する。違いはここにある。それでは幾つかの例をあげてみよう。

「人と相處するとき、謙虚で誠実であれ」

誠実重要である。誠実は一切の徳の働きの根本である。真の誠は菩提心の本体である。あらゆる徳、あらゆる働きは真の誠から生れる。心に真がなく、誠がなければ、一つのことすら成しとげることはできない。

「労苦を避けることなかれ、甘美をむさぼることなかれ」

「労苦を避けることなかれ」とは、人とともに事をなすとき、労苦をおそれず、苦しい仕事でも回避してはならないということである。

「甘美をむさぼることなかれ」とは、人と一緒に飲食しているとき、人と利をともにするとき、へりくだり譲ることを知らねばならないということである。これはみな、徳行の修養である。したがって、真の修行は、『華嚴経』で清涼大師が説いた事上錬磨、善財童子が五十三人に参じた遍歴にあるように、必ず実際の事に当たって精神を錬磨し、自己の貪[とん]（むさぼり）、瞋[じん]（怒り）、痴[ち]（愚かさ）、慢[まん]（おごり）を磨き捨てなければならない。心の境地において磨かなければ、毎日書を読んでも役に立たないし、毎日仏を拝んでも役に立たない。必ず、人とともにいて、社会の事がらがりまく環境や物質的な環境の中で鍛錬しなければならない。貪瞋痴の煩惱を磨き捨て去ることを真の修行という。そのとき、あなたは始めて、真の利益[りやく]を会得する。

「人に譲り、人を受け入れる」

人と相處するとき、譲ることを知らねばならない。人を受け入れなければならない。人を受け入れることのできる人、人に譲る人は福德がある。人を受け入れることができない人、人に譲ろうとしない人は福德がない。目の前に多少の福德があったとしても限りがあり、あつという間になくなってしまう。このことは、皆さんが自分の周辺の親戚や友人をつぶさに観察すれば、明らかであろう。およそ、人を受け入れることができる、人に譲ることができる人は将来、福に恵まれる。人を受け入れることのできない、人に譲ろうとしない人は晩年は苦しみ、悲惨である。善の報いは尽きている。

「自分が損をするほうがよく、自分がいじめられるほうがいい」

この二つは覚えておかなければならない。人とともに仕事をするとき、私が損をするほうがよい。私は人に損をかけたくない。他の人が私をいじめたら、私はそれを受け入れる。恨みはしない、避けたりしない、仕返しもしない。業のさわりが消えるからだ。決して人をいじめたりはしない。この道理を分から

なければならない。

「恩は忘れず、恨みは捨て去る」

私たちの心は善心である。すべての不善は心に留めておいてはいけない。心に留めると、私たちの心が不善になってしまう。これは間違いである。私たちはこの世と仏道の一切の善意と善行を心に留めて、一切の不善の心は必ず捨て去らなければならない。昔の高僧は、「一滴の水の恩に、常に湧泉で報いんとする」と説いた。私たちは他の人から一滴の水の恩を受け、いつも湧き水のように恩返しをしたい、自分の出来る限りの力で報いたいと思う。この社会で誰もが恩に報いたいという心をもっていたら、この世の中はなんと素晴らしいだろう。社会のみんなが恩知らずで、恨みを晴らそうとする気持ちだったら、なんと恐ろしい社会だろう。私たちは好い社会を作りたい。そのために、私たちは徳を増進させ、修行し、恩を知り、恩に報いて、恨みを解き放たなければならない。

「人の善を見てほめたたえ、人の過ちを聞いても何も言わない」

私たちは不善の人が善に戻るのをどうやって助けるか。好い方法は、他の人が少しの善行でも行なえば、それを広くほめたたえることである。人に過ちがあるときは、何も言わない。そしてこの人にゆっくり良心が現われるようにしていく。これが人を助け、人を成就させることであり、すなわち、教化である。

人が一善を行なったのに、みんなに知らせず、過ちがあったときには大騒ぎをする。これではこの人に恨まれるだけでなく、好ましくない印象も与え、社会の安全を損ねる。このような風潮が一たび広まるや、社会全体が乱れる。このような行為や考えは社会の安定を揺るがすもので、この社会問題を作り出した罪科は重い。これは一人の人間に対する罪ではなく、社会全体に対する罪である。

「人はあなたに、ある人があなたの恩に感謝していると言う。そこで、私のほうこそあの人に恩を感じており、その人は私に恩はないと言う」

これはへりくだり、礼をもって譲ることを述べている。ある人が私から受けた恩に感謝しているというのを伝え聞いた。そこで、私は伝えてくれた人に、実際は私のほうこそその人の恩に感謝しており、その人から受けた恩徳は多い、私はその人に与えた恩徳はないと告げる。このように話せば、誰かが必ずその人に伝えてくれる。その人の感謝の気持ちはますます深まり、よしみは自然にますます厚くなる。

「ある人が私に悩 [いか] り、私を謗 [そし] っていると伝える人がいる。そこで、二人は平素、仲がよく、悩み謗る道理などないと答える」

「悩み」は怒る、腹を立てる、「謗って」は中傷するの意味である。たとえ、本当にそうであっても、その話を私は認めない。たとえ、相手が面と向かって私に癩癩を起こしても、腹を立てても、冤罪を着せても、私はそれを受け入れ、聴き、そして根にもつようなことはない。その後、別の人から、あの人はなぜ、あんなに怒ったのか、なぜそのようにあなたを侮辱するのかと尋ねられとき、私は、私が悪かった、あの人を不愉快にさせた、私は悔い改める、以後このようなことはない、と答える。恨みに思っていないので、すぐにも消えてしまう。もし、根に持ち、始終気にしていると、ますます面倒なことになってしまう。この一生だけでなく、未来永劫、恨みを晴らしあい、終わることがなくなる。

特に、日常で人に対する、事に処するとき、人と人との関係が最も重要である。ごくわずかな裂け目もあってはならない。しかしながら、私たちは常日ごろ、そそのかしや仲をさく、仲違いさせようとするに出会う。それは何か。それは過去世の宿怨であり、前世の恨みであり、これによって誤解を造り出してしまふ。誤解は必ず解かなければならない。誤解をなくす道は常日ごろ、相手をほめたたえることである。相手を心に思っ忘れてないことである。相手に思いやりをもつことである。相手に困ったことがあったとき、必ず助ける、援助の手を差し伸べることである。恨みを根にもってはならない。それは誤解であって、小事である。永遠に他の人の長所を記憶にとどめておくことが必要である。他の人に長所が一つあったら、いつまでも忘れず、欠点が百個あってもきれいに忘れ去る。こうすると、このよしみは深まり、現在の社会を好くすることができる。社会のために好いことをするのは、衆生を教化することであり、これは菩薩の事業である。この世の事業を菩薩の事業に変えて、一切衆生に利益するのである。

「人が自分より勝れていれば、その人を敬い、重んじる」

智慧であれ、能力であれ、地位であれ、富であれ、私の上にあれば、その人を尊敬し、重視しなければならない。

「傲 [おご] り忌 [うら] みの心をもってはならない」

「傲り」は傲慢、「忌み」は嫉妬の意味である。例えば、傲慢である、嫉妬する、あるいは他の人が好いことをしているのに、何とかして邪魔しようとする

る。では、本当に邪魔できるのだろうか。もし、本当に邪魔することができるなら、因果の法則があなたに打ち倒されてしまう。そのようなことはあるはずがない。邪魔できないからには、邪魔をする必要はないのではないか。

傲慢と嫉妬は最も徳を欠くものである。もし、傲慢や嫉妬の心があるならば、あなたの命 [めい] の善の報い、福德、智慧はすべて、下降していく。本来は智慧があったのに、ぼんやりしてしまい、まるでいつも魔障（修行の妨げとなるもの）があるようになる。皆さんが周囲に注意を払っていると、それを感じ取ることができる。だから、傲慢と嫉妬は徳を最も損ない、智慧を最も妨害し、善の報いを最も減らす。ならば、どうしてこのような愚かなことができようか。

「人が我に及ばなくとも謙虚にし、軽んじたり、卑しむ心があつてはならない」

愚かな人、鈍根な人、自分に及ばない人、そのような人に対しては謙虚でなければならない。侮ったり、軽蔑することがあつてはならない。仏や菩薩はこれらの人たちを見て、不憫に思った。なぜであろうか。それは今日、このように愚かである、智慧がない、徳の働きがない、善い報いがないのは前世で善行を修めなかったからである。前世で悪業を数多く造ったので、今生でこのような報いを受けたのである。そこで、目覚めた人は不憫に思い、同情する。

他の人を偏見の目で見るのは自己の智慧、徳行、善い報いを最も損なう行為なので、私たちは行なつてはならない。私たちは自己の智慧や福德が増大することを望んでいる。それなのにあなたがこのようなことをしたら、あなたの智慧と福德は大幅に下降してしまう。この道理、この因果を理解すべきである。

「人との交わりが久しく、ますます密となれば、その行ないは家や国へ広がり、恨みはなくなる」

「人との交わり」とは人との交際、人と接することである。あなたがもし、前述の教訓のとおりに行なえば、月日が長くなればなるほど、関係は密接になる。信頼しあい、頼りにする。そして、親しみはますます深まる。これはあなたの家から近隣の人たちに影響を与え、近隣の人たちからその地区に影響を与える。その地区は国にまで影響を与えて、真に「恨みのない」真善美と智慧の社会になる。

今、私たちのこの世界を見ると、国連はどれだけの人力、財力、物力を費やして、恨みを解き去り、衝突を消滅させようとしているか。その結果、実効を

あげることができないでいる。その原因はどこにあるのか。それはここで楊公が述べておられるのと相応しないからである。もし、楊椒山先生がおっしゃった教訓のとおりに行なえば、衝突は必ず解消できる。

「老成忠厚で、書を読もうとする、学ぼうとする人に出会ったら、肝胆相照らす友とせよ」

「老成忠厚」は徳行のある人で、現代的な言い方をすれば、その人は本当に好人である。「老成」は真面目で、人に対して手厚くあたたかで、人のために己を捨てることができる人である。この人は他の人に損をさせたり、だましたりすることは決してない。自分がだまされても人をだますようなことはしない。このような人は得がたく、このような人と出会えるのは容易なことではない。

人のために己を捨て、書を読もうとする、学ぼうとする人は得がたく、出会えることは真に容易ではない。あなたの一生のうちで、縁によってこのような人と親しく交わることができるなら、あなたの一生は非常に幸運である。肝胆相照らす友として付きあうべきである。

「言葉は信が必要であり、日々相處し、その薫習を受ければ、自然に好人になる」

これは昔から言われている「朱に交われば赤くなる」である。『コーラン』では、「賢き善き人に親しみ、邪悪から遠ざかるべし」と説いている。すなわち、この意味である。その人は善き人である。善き人に親しめば、あなたは自然に善き人となる。その人が好人ならば、あなたは自然に好人に変わる。

では、好人はどこを探せばよいのか。求めてめぐり合えるものではない。しかし、あなたが本当に学びたい人が見つからないということはない。今の人たちの中から見つけれなかったら、昔の人の中から探す。これがすなわち、昔の高僧が説いた「なお古人を友にす」である。昔の人と友人になることである。昔の人はたいへん多い。古今東西からあなたの好きな人を選び、常日ごろその人の書を読み、友人として親しむ。月日とともに、その人の雰囲気があなたの雰囲気に相通じるようになる。今の人は気が合えば、すぐにも親しくなる。その人が聖人ならば、知らず知らずのうちにあなたも聖人になれる。その人が賢人ならば、あなたも賢人になれる。

「我、同学とともにこれに勉むことを願う」